

## ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル 1935年6月

— パリ国際作家会議の二人の講演について —

長谷川 淳 基

Robert Musil und Alfred Kerr  
im Juni 1935

Zu ihren Vorträgen vor dem internationalen Schriftstellerkongreß in Paris

Junki HASEGAWA

### I 始めに

ムージルとケルが生涯で最後に顔を合わせたのは何時だったのか？ 可能性ということでは、1935年6月21日から25日までパリで開かれた国際作家会議の折であろう。21日の会議初日にムージルは講演を行った。そして翌22日にケルも同じ会議で講演した。二人の講演内容はそれぞれに強く聴衆の関心を引くものであった。それゆえに、二人の講演内容については新聞報道がなされた。ただしその関心の払われかたは対照的で、ムージルについては口笛と共にやじが飛び交い散々の不評であったが、ケルに対しては熱い賞賛の拍手が会場一杯に湧き起こった。

1933年早々に亡命生活に入り、チェコ、スイス、そしてフランスへとさすらってきたケル。やがては、とは今1935年6月から数えて3年の後、1938年8月になってウィーンを離れイタリア経由でスイスに逃れ、そのまま客死することになるムージル。

ヒットラーが政権を握り強大な力を振るう現在、立場に大きく隔たりのあるムージルとケル二人の文筆家がこの国際会議の折に会場の聴衆に向けて、そして世に向けて何を考え、何を説いたのか。本論はこの点の分析を中心に、この会議の時期の二人の関係について考察する。

### II ムージルの講演

1935年6月21日金曜日午後9時に会議は始まった。3000席の入場券はすべて売り切れ。会場である共済組合会館には切符を持たない人々がさらに数百人詰めかけ、この人たちのために会場の外にもスピーカーが設置され、講演の音が流された<sup>1)</sup>。

以下、ムージル全集に採られている講演のための清書原稿<sup>2)</sup>を読み、その主張に耳を傾けることにしよう。

[パリの講演]

[文化擁護のための国際作家会議において]

「1935年7月」

[修正済み清書]

多くの問題点があらかじめ会議執行委員会の方々の周到な準備を経て提出されており、かつそれらの問題点のうちには私自身がすでに過去に考えをめぐらせたものも含まれているのですが、しかしながら、そうしたものからあらためて一つを取り上げて、綿密に検討を加えるという方法によってこのたびの報告を行うということは、特殊な状況が重なったことにより不可能でありましたことを、あらかじめお断りいたしておきます。

ムージルは完全な原稿を用意できなかった。ムージル自身の要望が聞き届けられた結果、彼の講演の予定日が急遽、会議の初日に変更になったこと、そのことに関連して、聴衆に配布されたムージルの講演内容のフランス語訳が実は別の講演者のものであったことなど、ムージルの演説は場当たりのものと受け止められたことが想像される。しかし、講演の内容に関しては綿密に考え抜かれたものであったことは間違いない。その点をムージルは、以下のように強調する。

文学、そしてこれをも包括し、幾分か不確かなところのある何ものか、すなわち文化と呼ばれているものが、引き続き自分自身の問題であり、かつ最も深く心を寄せる対象であるとする作家や詩人。そうした作家や詩人が、今まさにこの対象をおびやかしている大なる危機について話し合うために、初めて一堂に会したこと、この点こそがこの会議の大きな意義であると、自らに言い聞かせて先ずは納得しております。こうした催しの最初の時間には、種々様々ある意見の多様さについて相互に理解を得ること以上に、何らかの成果を想像することは難しきであろうということ、そしてそうであるならば「完成原稿」ではなく、草稿のプランと概略の方が大事ではなからうかと考えた次第です。

ムージルは原稿の推敲にいつも大変な時間とエネルギーを費やした作家である。完成原稿を用意できなかったことへの釈明から話し始めたムージルであるが、進むべき方向ははっきりと見据えている。

お話し申しあげようと考えた内容のプランと概略（討議の様々な要請の大規模なることを念頭におき、いわば、最小の空間に凝縮させることを心掛けた結果）は、その本質において非政治的である、ということです。最初にこれについてお詫びを申し上げることから話を始めたいと思います。と申しますのも、政治によって加えられた筆舌に尽くしがたい苦しみと不当な辱めが現に存在している故であり、もう一つには、人間は政治的要請から逃げてはいけないと発言する人たちが存在するからであります。私は長いこと政治から身を遠ざけてきました。政治には向いていないと感じていたからであります。政治はすべての人に関係があるのご異議については、私には理解の及ばないところであります。衛生学もまたすべての人間に関係があります。しかしながら、私は衛生学について公に発言したことはありません。衛生学者になれる才能がないと分かっているからであり、その点では政治家についても、地理学者についても同じです。

亡命生活を送っているケルのことがムージルの念頭にあったことは間違いなからう。多くの知識人が祖国を脱出しなければならない状況が生じている。そして何よりもその人々が逃げ込ん

だ国々がこうした亡命者を遇している状況は、決して賞賛されるものではなかった。すべての責めは政治に帰せられるべきものである。政治は決して善なるものではなく、現在のドイツの状況はその最たるものであり、かつそのドイツの政治状況への各国の対応もやはり善悪の判断に立っているわけではない。政治に距離を置いて生きることは、そうした場合に必ずしも非難されねばならないものではない。ムージルはこう語っている。

さて、これから政治と文化の境界、そして文化供給者の状況、特に詩人の状況に話が展開していくわけですが、一人の覇気のある臣民を想定してお話します。私自身としては、自分のもっとも身近な例としてドイツ語の詩人を念頭に置いているわけですが、この臣民にしてもまた、ドイツ国民の政治面の代表に対し、問題がなくもない状況に陥っているのです。目下はご存知の通り、その政治的代表はこの臣民に十全の服従を要求しています。ドイツ人の祖父たちには、どのような時にも免除されてきた言葉を使うならば、「完全なる」服従というものなのですが、これが現在では求められているのです。

この服従はしかしながら、彼がドイツ国とは違う国家に属している場合には、禁じられていることは勿論のこと、そればかりではなく彼に対しては、特別な文化的服従、あるいは順応ということが要求されるのです。例えばわが故郷オーストリアは詩人たちに対し、彼らがオーストリアの詩人であることを期待しているのです。詩人でありかつそれに加えてオーストリア、ということ人ではなく、特別な香りを放つ詩人というものを期待しています。そしてまた、オーストリアの詩人はドイツの詩人とは何時もどこかが異なっていた、ということを我々に証明してくれる文化史設計者の方々も存在しています。こうした事情は即座に、オーストリアの詩人という概念は、詩を作るオーストリア人の概念の一段下に位置するものとの考えを生み出すに至りました。

他の国々においても類似の状況が生じています。そして、本当に様々な存在する祖国の、それぞれの政治的、社会的な目的と考えるの求めるところは、文化概念より上位に位置するものとなっているわけです。

ドイツの詩人はヒトラー体制に、オーストリアの詩人は自国オーストリアの文化への服従が最優先される。すなわち文学は偏狭なナショナリズムを奉ずるように強制されている。オーストリア文学の評価は、作品がオーストリアの特徴を描いているかどうか価値基準にされている状況をムージルは指摘している。「文化史設計者」の代表は文学史家エドアルト・カストゥレであろう<sup>3)</sup>。

以上述べた事柄すべてからひとつの疑問が、様々な形式をとりはするものの、数としては一つだけの疑問が生じてきます。国民的という問題、そして詩人というものに限定すると、たとえばこういう形式となります—詩人という（いわば、残余の何物かとしての）概念はロシアの、ドイツの、英国の、等々の詩人というものから、ロシア人、ドイツ人、イギリス人等々を差し引いたものなのか、あるいは詩人という概念はこうしたものとは別の方法で獲得された概念であり、かつ上位の位置を占める概念で、これが国民という枠組みの中でたまたま特殊化しているものであるのかどうか？ 私の考えでは、これについては様々な理由から選択の余地はなく、自由に考えをめぐらしていただいた結果として、後者を答えとして選び取るについては少なからぬ人々が躊躇するであります。

その場合にまた、詩人という言葉の代わりに、文化という言葉を充てても差し支えがなからうことは勿論であり、国民的なものを特徴づける言葉に代えて、政治的な言葉、すなわちプロレタリア的だとかブルジョア的だとかファシスト的といった言葉を充てても、同じことが考えられるわけです。

こうした意見が同調者を見出すことができるかどうか、私にはわかりません。しかしながらこれは、思考方法から言って必然的な解答なのであり、その限りでは解答としてはただ有益というばかりであり、かつ誰を侵害することもないはずです。

一般に、解答を導き出すに際して、偏見に囚われない姿勢が消失してしまったことについては、二つの理由があります。包括的な理由としては、我々の時代の歴史は激化した集産主義に向かって発展してきたことが挙げられます。私が殊更に言い立てることでもありませんが、この集産主義はその形式ということでは何とそれぞれに異なっていることでしょう。その歴史的な瞬間は、そこそこで何と異なっていたでしょう。その未来の価値について何と異なった判断が下されることでしょう。かつてないほどに地球の大地の上、地球に間近いところを漂う絶滅の天使は、一切の予測を許してはくれません。

さて、計算のつかないことは無視すればよいと考えることにして、そうすると確からしさということでは、集産主義に向かった様々な前進的發展が世界の像を決定するのでしょうか。この発展に賛成する人々の数は増大し続けています。つまりその時点までの団結のみが、結果として獲得しえた成果の総計であるとされるにすぎないとしても、人々はさらにより一層の強力な結びつきを求めているわけです。

こうした結びつきというものは当然のことながら、文化の領域をも包み込むものであり、そのことはすでに今日、現実のものとなっているわけです。このいうなれば抱擁は文化をだめなものにしてしまっているのでしょうか、あるいは豊かにしているのでしょうか？ 政治家というものは麗しの文化については自らの政治による自然な戦利品とみなすのが常であり、かつては女性が勝者の腕に転がり込んだことと事情は同じです。これに対して私は、文化のその麗しさについては、女性が自分の身を守るときに発揮する高貴な振る舞いぶりが、是非とも必要であるということをお願いしたいのです。

後にも言及するが、ムージルは文化を比類のない魅力的で美しい女性になぞらえ、政治は、その形態はなんでもあれすべて低級な男であると解説しているのである。今回の文化擁護の会議は、時代の緊張した情勢を反映し、真剣で、そして重い空気が支配していた。ムージルはこうした場での講演で、笑いを取ろうとしたのである。ユーモアと茶目っ気に毒を含ませる文体、それはムージルがケルから学んだ文体、ケルという文筆家に必須の表現法であった。今この場で、張り詰めた空気が支配する会議の場で、ムージルはなおも自分自身であることを放棄することはしなかった。

もてはやされているソヴィエト連邦のコルホーズ・ソフホーズに象徴される政治も、「畜群が自治権を握る社会形態」<sup>4)</sup>を志向するものにすぎないという意味のことを、ムージルは口元に柔らかな笑みを浮かべながら言い放った。

歴史的な大変革の中で、自分自身が変革される対象になるという名誉を想像するとき、私は身の毛がよだちます。そのときには、一切は政治の干渉と侵害に他ならないとの単純で狭小な考えが、一時に胸に湧いてきます。帝国主義的決戦、ブルジョワジーによる死との戦い、プロレタリアによる権力形式の苦い青春、何であれこうした一切がそれぞれに脅威を感じており、その結果ありとあらゆる手段を動員しているわけです。

召集されたメンバーには文化も加わっています。

そして国家が、階級が、民族が、人種が、そしてキリスト教が我々に向かって異議を申し立てるだけにとどまらず、そうしたもののすべてが自ら率先して芸術家や学者の中へ入り込んできています。必要は発明の母（ことわざにいわく）で、我々はいざというときに神にすがるように教え込まれただけではなく、文学、絵画の創作、そして哲学することも教えられたというわけです。

彼らは少なくとも不屈の忍耐で、我々がいかに為すべきかを教えてくれているわけです。

政治は今日、目的のものを文化の分野にやって来て手に入れるのではなく、自ら運んで来て、分配してくれているわけです。

政治に支配され枠にはめ込まれている文学の状況、そしてその状況に追従することに何らの疑問を持たない一般的な状況への嫌悪感をムージルは語る。

ところで我々は、流れに逆らって泳ごうというのでしょうか、それとも流れに乗って泳ごうというのでしょうか？ 泳ぐとは、何もせずに成り行きに任せるということではありません。なるほど我々は、何らかの制限を加える全体権利と、個人の順応義務とを感じてはいるのですが、聖職者が神に対して持つと同様の義務も感じているのです。そしてそうした聖職者と同じように、我々は専門家として門外漢の間を動いているわけです。しかし私たちは神秘や啓示を持たずにやっていかねばならないのであり、我々に付託されている義務について、その根拠をどこに求めるべきか、その義務はどの範囲にまで及ぶものなのか、そして我々はこれをどのように実行しようと考えているのか、これらについての疑問は簡単には解けないのです。結局のところこうした疑問は、我々はいったい何者なのかという疑問に行き着くのであり、この疑問を我々自身、あえて自らに発することはないと考えるにしても、必ずや他者から我々に向けての問いかけは行われるのであり、かつ、その場合の問いかけにいつも親切な優しさがお供をしているかという、必ずしもそうとは限りません。

幻想をあるいは虚偽の仮面を打ち捨てて、現実を見つめること、そして詩人・作家の本来的な使命の自覚ないしは覚醒をムージルは呼びかけている。

文化の奉仕者、救済者、供給者！ この会議の枠組みの中では、我々はこのような外観を有しているに違いありません。こうしたイメージを持つことは何か特定の文化を思い浮かべてみるならば、それが既存のものであれ、この先に招来されるものであれ、容易なことです。しかしながら、あれやこれやの不必要と思われるもの、望まれていないものが、それでもなお文化であるかどうか、このことが問題となっている場合に、文化とは何でしょうか？ この疑問はあるいは、6つの壁はどのような場合に一つの部屋を構成することになるのか、という疑問のようなものです。私たちはただ単に、そうした壁の内部にいて、家具調度の間に存在する一定の、かつ程度の差こそあれそれぞれに独立した繋がりの中で、ただ習慣的に散らかしたり、片付けたりしているにすぎません！ 実際に我々は、文化はどのようにして発生し、破滅していくのかについて、ほとんど知識を持ち合わせていません。

ある文化の虚偽性への仮借ない告発が、それ以降の文化観の出発点となりうる場合のことを念頭に置きながら、ムージルは世を覆う新たなユートピア思想の楽観主義に対して、懐疑的な立場をとることを明確に述べている。

例えばですが—この例は決して偶然に思いついたものではありません—平和を愛する心も文化の一部を構成しているのでしょうか？ 文化を愛する人は、平和を愛します。というのも戦争中の民族（同じく、内部で激しい階層変化が続いている民族）が、文化の生産に何らの寄与も果たさない点では、生命の危機に瀕している個人の場合と事情は同じです。つまりは、ある種の自然な平和主義といったものが存在するわけですが、同様に、生まれつきの非政治的性格というものも存在し、この性格の持ち主にとって文化の仕事が重大な意義を持つという場合があるのです。

これについてはニーチェが主張しており、政治の力が強い時代と、文化が重要視される時代は一致することがないのです。その他、戦争は個々具体的な点においても非難されるべき行為から成り立っているものであることについては、今は言及を差し控えさせていただきます。

勝利の後ということでは別の事情があります。全般的に言って、勝利を収めた国々は偉大な文化を生み出してきました。その理由として言われることは、それらの国々は戦争を通じて豊かになったからである、というものです。この結果、戦争遂行の価値を説明するのに、非戦の長所にその根拠を求めるという奇妙なパラドックスが生まれることになります。しかしながらこう言われることもあります。彼らは強かったから、と。この場合に文化はいわば戦争の心理的な報酬として、あるいはその心優しい姉妹として登場するのである、と。こうした思考過程を説いているもの、これは周知の文化哲学です。

この文化哲学と、そして大勢の人々が英雄主義について思索をめぐらすことをしないということから、いや、もしくはそうではなくおそらくは英雄主義に対して恐れを抱いているという事実から、「鍛錬の世界観」への近道が通じることとなります。この世界観は、平和ならびに仕事への「自然の」愛情をおおよそのところで非常に手荒く扱う点で、猟師が猟犬をしつける時の態度と同じです。

周知の文化哲学とはすなわち、文化と文明の対立に関する議論のことである。文化は国家と切り離しては考えることができないとの考え方、ないしは国民国家の賛美と文化的充実の密接な関係の主張をムージルは批判的に紹介している。そうしたナショナリズムと、そして世を覆う粗雑な英雄観があいまって短絡的に軍国主義支持の空気を形成していること、その場合の大衆あるいは国民の無批判な行動ぶりは、犬と何ら変わるところがないほどに忠実で健気なものであると、ムージルはその理性不在を易しく噛んで含めるように解説する。

一言で言うならば、文化に関しては（そして感情に関してもまた）他のもので代替されえない公理なるものは存在せず、それゆえに新たな土台があれば、新たな文化が可能となるのです。決定的な点は、全体は関連の中にあるということであり、事実、一人の人間の主義や行動を個々に取り上げてみても、その人物が愚者であるのか、それとも天才なのか、あるいは生まれつきの犯罪者なのかは、言い当てることはできないのです。

ムージルは純粋理論のレベルで議論を展開している。会議場において自明なものとして了解されている文化概念に対して疑義を唱えたムージル。彼の関心は精密な議論、この一点である。ヒトラーひとりが良いか悪いか、少しもそうした次元への視点がないのである。

この他に一遺稿の断章の中に一はるか先を見通した恐ろしいニーチェの覚書があります（この偉大な分析家の言葉を引用するのはこれで二度目になりますが、それというのも彼は偉大な予言者でもあったためです）。その覚書とはこうです—「道徳的理想の勝利が非道徳的な手段、すなわち暴力、虚言、中傷、不正によって勝ち得られる事実は、あらゆる勝利と変わりがない」。

我々が、このまさに新しい男の粗野で本末転倒した言動に腹を立てるだけでなく、この個人的な腹立ちと創造史の原則とを混同するとき、我々はそのたびに、偉大な真理を内容とするこの観察に造反しているわけであります。習慣的なことを必然的なものと考えすることは、当然ありうることなのです。

権威主義的な国家形式に対する嫌悪の一部は、なるほど単に議会制民主主義国家形式への慣れ親しみに起因するものなのでしょう。この議会制民主主義国家形式は、少々くたびれて、しかし

ながら着心地のよくなった背広に対して覚えるのと同じ愛着を呼び醒ましてくれます。それは文化に対して大きな自由を与えてくれます。しかしながら同じ程度の自由を、それらの国家は自らに寄生する虫たちにも認めるわけです。これらの虫たちに発達能力がないとは申しません。が、長所、短所様々あっても、文化の営みと寄生虫のそれとを同列に置くことは、決して正しいことではありません。

嫌悪の対象、それはヒトラーでもあれば民主主義と呼ばれている国の中の一切の俗物的存在も同じであるとムージルは言い、そうであれば国家形態の議論は無意味であること、その一方、創造の契機の神秘と複雑さについては、政治を絡めて議論をしても解答は得られないことをムージルは言っている。

「特性のない男」とはやはりムージルのことである。敵は誰か、味方はだれか。ムージルはこの会議で皆が自明の事として了解しているはずのことに対して、同調する態度を示さない。悪しき独裁政治からも何か善なるものが誕生する可能性もあれば、民主主義の国家において、ないしは民主主義の国家なればこそ悪しきものが生み出される可能性もある。ムージルはそう説明する。個々の事実を拾い出すならば、あるいは理論としてはその通りなのかもしれない。しかし、このことを、この会議で言うムージルは改めて不思議な人という感じがする。人間存在の真実を獲得することへの執念の持ち主、それがムージルなのであろう。

文学が時代の権力に媚びることについても言われている。ヒトラーが政権を取って以降の文学への圧力と、それがもたらした状況は尋常なものではなかった。リテラーリッシュ・ヴェルト紙は1933年のうちにとうに売りに出され、作家たちは雪崩を打ってドイツから逃げていた。残った国内の文学の流れはナチス・ヒトラー賛美に傾いていた。こうした作家たちは非難されるべきであるが、一方、民主主義といわれる国家にあって、無批判なままに国家権力を支え、奉仕することをなしてきた作家たちの行為そしてその国家のありようは同列に並べられるべき罪ではないか、とムージルは言う。ムージルの言葉にヒトラー政権への非難の論調を、または民主主義国家擁護のそれを聞き取ろうとする者には、ただ戸惑いとしてそれに続いて怒りの感情が湧き上がるだけであらう。

文化はいかなる政治的形式にも縛られていません。文化はすべての政治形式から固有の刺激と抑制を受けます。なるほど、文化の担い手たちの各々は自分が抱いている要求の分け前を考慮して、ある特定の政治形式について、これが自分に一番気に入っていると、これが将来もっとも有望であるとかの決定を下すことはあります。しかし、多かれ少なかれ彼はこのことを私人としてやっているわけです（少なくとも私は自分のことではそのように感じています）。彼の本来的な使命の遂行に際しては、彼自身そうした政治形式に対して、程度の差こそあれ自己を防衛する義務があるでしょう。

ムージルは自分という存在の限界を認識しつつも、なおその限界の先に存在する真実の獲得を目論んでいる。壇上のムージルは、話を「特性のない男」についての解説へと繋げていく。

その際に、彼は伝承されてきた理想から逃れることはできません。というのも、伝承されてきた理想は、全体の展開の中でたちまちのうちにその形を変えることを、彼自身理解しているからです。彼には、個人の、言ってみれば完全な未来の文化プログラムを作成することはできないのです。彼はこの場合にソクラテスの博識を持っており、その博識が彼に、自分は一切を知ってい

るという自惚れを許さないからです。

もう一度申さねばなりません。我々にとって文化とは、何か伝承されたもの、体験されたものであり、定義可能なイメージというよりは、我々の中を、我々の間を生きつづける意志と言うほうがより適切なのです。文化とは仕事と活動の総体のことであり、そうした仕事や活動は果てしなく数え上げることができます。例えば誰かある人がおよそ厳密とはいえないこの認識の代わりに、一貫した思考による確固たる認識をもたらしてくれる場合、その人はまた一つ仕事を多く成し遂げたというだけのことです。

精密さを志向する個人の限界と宿命をムージルは語る。そのうえで、しかしながらそうしたものを否定的なものとして受け止める必要のないことをムージルは説明する。

しかしながら、これは弱点の根拠を言っているのではありません。概念ではなく、人間の能力を手に入れること、このことこそが肝要な点です。そしてまた人は、そうした人間存在やその発展に関しては、我々が文化の最終目的に関する知識を欠いていると同様、何も知識を持ってはいないのです。

こういうわけで、例えば文化が超国民的なものではないと仮定するにしても、超時間的な何ものであることは疑いのないところです。ある一つの民族について考えてみましょう。没落し中断があった後、再び穂が接がれる際には、大きな時間的隔たりが飛び越えられるわけですが、このことは特に珍しいことではありません。ここから得られる結論は、文化に奉仕する人々にとって、自己を余すところなく国民的文化の現況と同一視することは、厳禁ということです。

そしてまた、文化が常に、<sup>ナチオナル</sup>国民的な性格を帯びているのと少なくとも同じ程度には、<sup>インターナショナル</sup>国際的であったことも確かです。芸術と学問の歴史はこのことを示す唯一の例です。未開人の文化ですら、こうした事実を提示しています。

特にその最上層の人々の間では、文化は超国民的關係にあふれたものとなっています。天才の配分は、他の稀有な存在の出現と同様に行われているわけです。

上のくだりについては、ムージルはオーストリア＝ハンガリー帝国治下の、どこかの地で生まれ育った作家であることが確認できると言うべきか、あるいは『特性のない男』の一節を思わせる文章であると言うべきであろう。

以下では、文化創造の契機についてムージルがその確信するところを述べている。

また、文化の伝承はただ単に手から手へと手渡されるものではなく、さしあたっては説明のつかない奇妙ななりゆきがある種の役目を果たしています。すなわち、創造的な人間は過去のもの（あるいは他の場所からやってきたもの）を引き継ぐというのではなく、彼らの中で何かが新しく生まれ、そうしたものを通して太古の歴史が繰り返し新たに活性化され、個々人の変更が加えられるのです。

これに加えて我々は、こうした成り行きの担い手は個々の人間であることを知っています。共同体の果たす役目は大変に重要です。しかしその役割を極度に強調するときですら、個人こそが文化を作る道具であることを認めるべきでしょう。そうしてこそ、文化生成のための周知の大規模



な一連の諸条件、すなわち個人的創造に関連するすべての条件が整うことになるのです。

知識、自由—政治的な概念としてではなく心理的な概念として—、そして大胆さ、精神の不穏さ、探求欲、率直さ、責任感、こうした特性がすべての人に支持されるのでなければ、それらが優れた才能の持ち主の中に存在している場合にも、決して表面には出てこないのです。

我々は、偉大な精神の持ち主を形成している特性の領域を、おおよそにおいて記述することができます。そのような精神は、豊かであり、精密で、抽象能力にすぐれ、明晰で、散漫なところがなく、しかし運動性がある等々。その人は豊富な経験と、最小値の偏見を持っているに違いありません。そしてその他、名前を挙げることのできる特性をも豊かに持っており、また当然のことながらそうした特性は、同時に現出している必要はないものの、間違いが埋め合わされる程度には目に見える形で表れているであります。

真実を愛する心も備わっているに違いありません。これについては特に言及しておきたいと思えます。というのも現代においては、この真実への愛は特に大きいとは言えず、また、我々が文化と名付けているものは、なるほど直接に真実の概念を試金石とするものではないものの、いかなる文化も真実に対する斜めの関係の上には成立し得ないからであります。

先にも触れたが、ムージルの講演草稿は2種が全集に採られている。もう一つの稿ではこのくだりに「詳しい説明は省くことにしたいと思います、政治的に踏みじられ、ぼろぼろに摩滅され、そして非難を受けている沢山の概念が、歴史の清めを受けて、今ここに心理的に不可欠の概念として再び顔を出すわけです。例えば自由、率直さ、勇気、清廉潔白、責任感そして批判性。これらは我々を拒否するものに対しての場合よりも、我々を誘惑するものに立ち向かうときに力を発揮します」<sup>5)</sup> となっている。

政治は言葉をその時々都合よく使い、人々を扇動してきた。自由の獲得、あるいは勇気という言葉を使って、政治は民衆を操り、人間一人ひとりを縛り、そして殺してきた。しかし、人間が自身の使命を自覚し、それを実現しようとするとき、その人間に必要なものを指し示す言葉とは、残念ながら現在に至るまで政治によって汚されてきた言葉でしかない、とムージルは説明する。政治は扇動する、そして政治は奪う、必要な自由は心の自由であり、これは政治と無関係に機能する、こうした点を最後に説いてムージルは文化が創造される諸条件についての考察を語り終えた。

会議の場でムージルが実際に行った講演内容について、全集の編者フリゼーは今こまで訳出してきた原稿「修正済み清書」がそれであろうと考えているが、例えばコリーノはもう一方の原稿「修正済みタイプ原稿」<sup>6)</sup>、すなわち短い方の原稿をそれと見なしている。本論の先で言及するキッシュとウーゼ連名の論説で引用されているムージルの発言も、後者の「タイプ原稿」の中の表現に一致しているのであるが、会議の席上でムージルが話した内容は正確なところは不明である。以下、結びの言葉が続く。

私が結論のないままに話を終えることは、私のささやかな話の内容に沿うものであります。私としては、世界を精神の影響を通して良化することが可能かどうかについては、疑わしく思っております。出来事の推進力は、どこか野蛮な性質を帯びているなものかなのです。しかし我々は、精神が自分自身について提出すべき要請を、思い出さねばなりません。我々はそうした要請を作成し、権力を委託されている人々に、あるいはそう信じ込んでいる人々に、我々の能力に応じて、これを強く主張するべきであります。(PI, 1259-1265)

ムージルの演説は大いなる批判、スキャンダルと言いうるほどの反応を引き起こした。それ

らの批判について確認しておこう。

### III ムージルの講演への反応

#### その1 エドワール・ロディティの回想録<sup>7)</sup>

ロディティはこの会議におけるミュージルについて詳細な回想記を書いている。その回想の中でも、ジッドがブルーストを拒否したように、ミュージルの文学に対しても何らの興味も抱かなかったとの報告<sup>8)</sup>、ならびにミュージルの講演の直後に「ドイツ語が分かった聴衆たちの中の多くが、一そしてその中にはドイツから逃れてきた著名な作家たちも何人か混じっていたのだが一口笛を吹いてミュージルをやじった」<sup>9)</sup> という記述は印象的である。ロディティの回想は、ミュージルの講演が散々な結果に終わったことをはっきりと伝えている。

#### その2 エゴン・エルヴィン・キッシュの講演

ミュージルが話し終えたあと、一人の講演者をはさんでエゴン・エルヴィン・キッシュが話をした<sup>10)</sup>。要は社会的真実を描くルポルタージュ文学の意義の主張であった。話の流れはこうであった。まずは文学の定義。本来的な文学のほかに、事実報道も文学になりうることを、その他映画、ラジオドラマ、文芸欄記事なども文学に属する。ここでは、その時々政治体制に取り込まれ、その結果その政治体制を支える役割を果たしてきている文学への批判が主張される。こう語ったキッシュは次いで、割り当てられた講演の持ち時間に余裕があるから、と前置きした上で別の話題を持ち出す。従来の旅行文学は事実から目を背ける面があり、歴史と自然の賛歌を歌う一方で、日常の真の姿を描くことをしていない。ルポルタージュ文学がそれを可能にする。新しい文学ジャンルの宣言であり、従来の旅行文学の否定という文脈から唱えられるルポルタージュ文学賛歌はケルなどへの批判とも聞こえなくはない。感情を強調した不明瞭な文学、そして血と大地への神秘的熱狂の文学が現在のドイツで流行している現実を見つめるとき、必要なものは社会的真実を内容とする文学すなわちルポルタージュ文学である。キッシュはこう自説を展開しつつ、非政治的人間を唱える作家であってもこの点ぐらいは理解できるであろうと付け加え、先に講演を終えたミュージルを批判した。

#### その3 パリーザー・ターゲブラット紙の論評

会議初日の講演の2日後1935年6月23日付パリーザー・ターゲブラットに、ミュージルの演説等、初日の全体を論評する記事<sup>11)</sup>が出た。記事の全文を読んでみよう。

#### 作家たちの精神の最前線

##### 国際会議の開幕

1900年、アンドレ・ジッドは書いた。「プロイセンはドイツを徹底的に抑圧した。その徹底振りのゆえにドイツの人々は、ゲーテはあらゆるドイツ人の中で最もドイツ人らしくない人間であると認めざるを得なくなったのである」と。これは予言であった。すなわち、より広い視点からすると現在の破壊的な独裁政治は古い時代のドイツの偏狭な俗物に由来しているにすぎないわけであるが、今や、こうした凡庸さの蜂起はいわゆる西洋文化圏の他の国々や民族にとっても特徴的な症状になっている。文化に対するこうした普遍的な脅威を阻止することが国際作家会議の意義である。この会議の開会が、金曜日夕刻パリの共済組合会館で、未来を見通す能力を備えながらも、同時に断固として戦い抜く意志も併せ持っているアンドレ・ジッドにより告げられた。

その開会宣言で、以下の標語が述べられた。「文化を圧殺するファシズムはそれぞれ自分の国に存在している。我々は互いにそのファシズムを明らかにしよう。それによって、我々を脅かしている伝染病の感染の危険に対して共同して戦線を張ろう。」

精神的分野の国家代表メンバーを脅かすそうした反動が身につけている仮面と方策の多様性について、エドワード・M・フォスターは故郷の国、すなわち民主的自由の本拠地の例を取り上げた。そこでは合法的ジェントルマン・ファシズムがはびこっている。つまりは公的生活が、文化的自立はただ白人と「良き社会層」にのみ是認されるとの考え方の中に侵入しているのである。「蜂起行動」は書籍類の禁止と好ましからざる思想の排除のための様々な可能性を与えている。

今このバリの課題は、他の西洋文化のすべての国々の課題と共通であり、それは趣味といった副次的なことではなく、暴力に関することが問題となっている。自分自身を文化と、そして著作の担い手であると考えた人間にとって。それが昨日の特権の人物であれ、あるいは緊張しながら背伸びしている一般大衆の若者であれ。この中心的問題について、その回答は全面的な文化革命を意味するのであるが、慎重な態度で後を受けたのがフランス人のジュリアン・バンダとオーストリア人のローベルト・ムージルであったが、そうした一方でエゴン・エルヴィン・キッシュ（彼は唯一、フリーターキングの利点を生かした）は、いささかのためらいも見せず敢然と答えを述べた。

バンダであるが、彼はアカデミズムの立場から、ヨーロッパ的伝統に関してこれまでただ一つだけ通用してきた生活領域に新しい生活領域が登場したことを確認した。

ムージルは文学が政治と経済に従属することについて反論した。少なくとも彼は、作家は純粹精神の抽象的広野に向かうべきであると指示した。

これに対してキッシュは文筆家たちを今日の社会情勢を維持する者たちと、この情勢を攻撃し、破壊しようとする者たちに分別する。キッシュの言うところによると、ブルジョワ社会は情勢に攻撃を仕掛けられない者にのみ自由を認める。「美しく装っている法律は、しかしながら、社会に対立的な立場をとる者、とはもちろん支配者階級に逆らう者ということであるが、そうした人々たちに対しては容赦することはない。そうしたアウトサイダーたちには月並みとか空想力の欠如という烙印が押される。しかしながらキッシュもまた「月並み」とか「デマゴギー的な」と決め付けられることに甘んじるつもりはない。彼はこれまでの文化遺産を積極的に受け入れるのであるが、それはあくまでもこの遺産を大衆の要求する世界に移入しようとの意図が働いてのことである。その際に決定的なことはただ、実際にすべての大衆が向上と支配権を要求しているということである。事態を正しく見る目と先入観を排除した報道が、因習と虚偽に対する最も効果的な武器であることを主張しながら「疾走する報道記者」が加わる戦線は、一致を見ており、すなわちこの戦線は単にファシズムを倒すだけではなく、新しい人間性の国家記章に向かって行進していくことを意図するものである。

R. Br.

この記事は、ムージルの講演に関心を示さず、キッシュをムージルと対照的な立場に立つ者と認めたうえで、その講演内容を詳しく報じ、1924年の著作「疾走する報道記者」の作者キッシュを称えている。

#### その4 ボード・ウーゼの講演

ボード・ウーゼは会議最終日、6月25日火曜日午後の演説でムージルを名指しで批判した<sup>12)</sup>。

我々のディスカッションは、ファシズムの脅威にさらされている文化を巡ってのものでした。今このディスカッションを一つの方角について拡大する必要に迫られています。これに関して、我々が無関心ではいられない例を手がかりに、考察してみたいと思います。この問題をはっきりさせるために、特に我々の興味を引く領域で起きていることを取り上げます。それはわが祖

国の文学のことです。ちなみに祖国という言い方ですが、私がドイツ語という手段でドイツの恥辱と戦ったために、私の市民権が剥奪されてしまったわけですが、それでも祖国はやはり祖国なのです。この会議で述べられたどの意見にも、我々特に追放されたドイツの文筆家にとって、長期にわたる重大な経験が共通して表れています。しかしながら、我々が協力して行っている努力が実を結ぶために不可欠なことは何か、この点についてこれまで以上に明確な関心を払うとき、この演壇から我々が母国語で告げられた見解に反対することは必然的なことであります。

ローベルト・ムージルはこの会議の第一日目における講演で、政治と文化は互いに関係しないこと、文化はいかなる政治形態とも結びつきを持っていないという立場に立って考えを述べました。

私としては、ローベルト・ムージルよ、あなたが文化と政治の対立ということで展開した政治という概念は、必ずしもそのように窮屈に理解されるべきではないと反論したい。政治は社会的諸関係の姿であり表現です。我々全員が政治の影響下にあり、すなわち我々は政治との関係を免れることはできず、また政治の対象であり、それどころか我々が承認しようと思う以上のものなのです。—そういうわけで我々は、このホールにもそれぞれの人民の代表者の方々が出席されているあの同盟を羨ましく思うわけです。彼らのもとでは、人間は政治の主体となったのであり、すなわち人間は社会的諸関係に苦しむことはなく、それらの関係を自らが形成するわけです。

しかしながら私は、あなたに反論するための証人としてこれらの友人を喚問しようとは思っていません。私はあなたに反論する証人として、あなた自身にお出まし願おうと思っています。あなたの不利になることをお尋ねしますが、あなたは政治が造形芸術家の人生に影響を与えていること、政治が芸術作品に影響を与えていること、政治がまさに創造のプロセスを政治の諸法則に隷属させていることを経験しなかったでしょうか？　こういうことがあなたの国と私の国において、核心の部分において文化を敵視する点で全く同一の傾向を伴って起きているわけです。

あなたを、我々の共通の友人であるエゴン・エルヴィン・キッシュが所属した部隊の中隊長にしたのは、政治というものではなかったのでしょうか？　あなたと彼が当時置かれていた状況は、何らかの意味合いにおいてあなたとそして彼の成長にとって、あなたの思考にとって、あなたの文学形式にとって重要なものではなかったのではないですか？　答えは聞くまでもありません。そして今日、あなたとキッシュは偶然によって異なる陣営に属している。あなたはこの会議において、いうなれば文化擁護の戦いで政治的手段を用いることに反対する立場から、文化が崩壊する時代に往々にして偉大な文化的業績が発生したとの申し立てをしました。その点については、その通りです。

特定の個人を過大に評価し、同時に何百万の個人を破滅させるブルジョワ社会の崩壊は、マルセル・ブルーストとジェームス・ジョイスとあなたにおいて、偉大な解釈者を見出したわけです。来るべき時代には、そのときには歴史書は我々の時代の病んだ、気の滅入るような、不恰好な姿についてはほんの僅かしか言及することはないでしょうが、ローベルト・ムージルよ、あなたの作品はブルジョワ的なものが崩壊するこの時代の美しいドキュメントとして読まれることでしょう。あなたがこの会議において認めることが必要だとみなした以上に、ナチの政権獲得以来のドイツ国内のドイツ文学の衰退、言い換えるならば、文化に及ぼすファシズムの破壊的な影響の事実、そして独自の文化を創るためのファシズムの無能力ということはあなたの関心を引いてきたわけです。つまり政治と文化の関連性ということです。[……]

彼は続いてこの後ナチ政権下の文学の状況を語り、エーリク・レーガー、ハンス・ファラダがリアリズムから牧歌へと「逃亡した」こと、ナチズムに加担するアルフレート・カラシュの虚偽性などに言及し、マックス・ブロートがナチスと関係付けて説いたロマン主義解釈を批判して講演を終えた。

ボード・ウーゼであるが1904年生まれ、当初はナチス党员。1931年に共産党员に転じ、亡命

生活を送る中、スペイン市民戦争に加わった。1940年にはスペインに亡命、戦後東ドイツに戻りベルリンの雑誌アウフバウの編集者になり、1963年に没した。

名指して批判されたムージルであるが、ムージルはこの日、共済組合会館に居合わせたのだろうか。コリーノはそうのように判断している<sup>13)</sup>が、ムージルは会場にはいなかったのではなかろうか。会場で直接ウーゼの批判を浴びたのなら、その場でムージルはウーゼに対し何らかの反論をしたはずであるが、ムージルの手紙・日記等でも、またウーゼの方も8月になってキッシュと連名で書いたムージル批判の論説の中でも、そうしたことを窺わせる言及はない。またこの批判へのムージルの反論の中にも、直接会場で批判を聞いた旨の言及がない。ムージルが会議場に居合わせた可能性は少ないと考えるべきであろう。

ウーゼの講演内容のうち、ムージルの軍人としての経歴に言及した部分に関してだが、コリーノはこれを論旨の逸脱とみなし、「なんと無駄な」<sup>14)</sup>と断じている。

その5 キッシュとウーゼ連名の論文「力に抗する精神—『文化擁護のための国際作家会議』に寄せて」<sup>15)</sup>

会議の場でもムージルに対して批判的立場を表明したキッシュとウーゼは、続いてプラハの雑誌でムージルへの批判を活字にした。

力に抗する精神—『文化擁護のための国際作家会議』に寄せて  
エゴン・エルヴィン・キッシュならびにボード・ウーゼ

[……] ローベルト・ムージルは、文化的創造は個人に結びついていると言った。個人が誰に、そして何に結びついているかを彼は言おうとしなかった。個人的創造力の諸条件が文化に依存していることを説明する代わりに、彼はその逆のことを説明した。ないしは少なくとも文化の生成のためには個人的な創造力が従属している諸条件が力を持つと主張した。「歴史上誤解されてきた多くの概念が今ここでその根源性において、すなわち心理的概念として反復される」。これまで非社会的に問題を見てきた人間にとって、社会的な問題がいかにそれまで馴染みのないものであったかを、我々はこの言葉から理解する。しかしながら彼も社会的な問題から逃れることはできない。ドイツの強制収容所で思考する人間の皮膚と腎臓とを打つ鞭は、苦しむ人物の心理学的概念だけではなく、そして「個人的な創造力」だけでなく、盲目ではなくまた耳が不自由でないすべての人間の創造力にも変更を加えるに違いない。[……]

ムージルはこの論文に、非常な打撃を受けたと思われる。彼はこの文章に反論しようとして、文案を練った。「報告の修正報告」<sup>16)</sup>と題するこの文章は結局どこにも発表されなかったが、フリゼーの編集したムージルの『日記』の第2巻にこの文案が収録されている。フリゼーはまたこの草案と並べて、オットー・ペヒトの所有になるムージルのペン書きの文章「政治と文化の境界」<sup>17)</sup>を併せて紹介している。両方の文章は、講演の意図するところをムージル自ら解説している点で読み落とせない資料である。内容を見ておこう。

オットー・ペヒトが所有している「政治と文化の境界」には、ムージルの講演の要点が簡潔に記されている。そのうちで特に興味深い記述は書き出しの文である。「どのような方法で、何に対して文化が守られねばならないか、この疑問は尽きるところがない。通常ということと言うならば、友人と、そして敵に対しては防御せねばならないわけである」。

本論の始めに全文を読んだムージルの講演の中では語句の一部が置き換えられていたが、こ

の文によるとムージルははっきりと文化を女性に見立て、しかも特別に魅力に富んだ女性になぞらえており、そうであるからには、とは自分が好ましく思っているこの女性を自分のもとにこの先もとどめておくためには、およそすべての男という男には信用を置いてはならない、とムージルはウィーンから同行してきた懇意の若き芸術史家、後年のウィーン大学教授ベヒトにユーモアを込めて自らの講演の趣旨を解説したのである<sup>18)</sup>。

キッシュとウーゼ連名の記事への反論の骨子は、会議でのムージルの発言が誤解・曲解されていること、またそれについては自らの舌足らずにも責任があることが詳細に分析されている。ムージルはこの草稿で、ジッドのバリ講演の言葉も引用している。「私は、かけだしの時代に何ら世間の関心を引かない作家について、その作家を軽んじることは間違っているという大事な教訓を心に留めておきたい」<sup>19)</sup> という文がそれで、ムージルはこれを自己の弁護に当てようとしているが、ジッド自身はその講演でムージルの唱えた考えを批判していた。ムージルもこれについては承知していたが、あえてジッドの言葉を引くことでジッドにも反論しようとしたわけである。ムージル非難の包囲網は大きくかつ強力であり、ムージルの立場は苦しかった。ムージル包囲網には、中傷・デマの類も含まれていた。

#### その6 アルバイター・ツァイトウングのムージル批判

そうした一つが1934年以来ブリュンに亡命しているオーストリア社会民主党機関紙アルバイター・ツァイトウング紙1935年7月14日付の記事<sup>20)</sup>である。

オーストリア・ファシズムの「文化」使節、ひじ鉄砲を食らう／先頃バリにおいて「文化擁護のための」革命的な反ファシズム作家の会議が開催された。主催者側に大きな過ちがあった結果として、オーストリアの代表としてローベルト・ムージル氏もこの集まりに顔を見せることになった。彼はオーストリアの教会ファシズムと共通の文化基盤に立っており、作品をウィーンのラジオで朗読している。この他に、会議でも語ったことであるが、「文化と政治は互いに何の関係も有しない」との理論を作り上げた。この臆病な逃亡について、彼は会議の参加者から相応の回答を受け取った。亡命生活を送っているドイツの作家ボード・ウーゼは会議場の拍手を浴びる中、オーストリアでこうした文化敵対の傾向がある点はドイツにおいても同じであることを、はっきりと主張した。

この記事の中で、ムージルのプロフィールとしてカトリック教会との思想的親近性が言われている点、そしてウィーン・ラジオでの朗読は事実ではない<sup>21)</sup>。

以上6点がムージルの講演が引き起こした反響に関する資料として知られているものである。ところでムージル自身はこうした事実をどのように感じていたのであろうか？ キッシュとウーゼ連名の論説へのムージルの反論草稿については先に紹介したが、その点に関してはさらにムージルの2通の手紙がある。

最初の一通は会議から2ヵ月後の8月24日、ベルナール・ギュマンに宛てた手紙である。

1935年8月24日

親愛なるギュマン様  
[……]

会議は全く政治的なものであり、そのため主催者側を幻滅させるという残念な結果を招くことになったわけですが、その原因については、当然に期待されている状況について事前に十分に理

解しないまま、会議への招待を受諾したことにあるのでしょう。これとは別に私の気持ちからしても、私は自分の講演について満足はしていません。即興で片づけなければならない状況に立ち至った場合には、いつもこうした結果になるのですが。政治と文学の関係に関するこれまでの理解と比較して、今回の雰囲気はすべての価値に対して非常にリベラルで、理解を示すものでした。ただしそうしたことも、やはり多かれ少なかれ自身のドグマに照らしての判断という態度以上のものではありませんでした。ジッドはレトリックが光を放つ演説をしましたが、私が理解した限りでは特に指摘すべき点はなかったと思います。彼は心ここにあらず、という状態でしたので、私たちはほんのわずか話をしただけです。[……] (BI. 654f.)

ベルナール・ギュマンはマグデブルク新聞の文芸欄編集者で、1925年にジッドの「田園交響楽」も翻訳しており、またケルとも懇意のジャーナリストであった。この手紙でも、ムージルは自身が会議の政治的性格を理解しないままに、自らの講演を行ったことを認めている。

もう一通はさらに一ヵ月後の9月22日、バーゼルの若いジャーナリスト、ハリー・ゴルトシュミットに宛てた手紙である。

35年 9 月 22 日

拝啓 ゴルトシュミット様 (バーゼル)

[……]

パリで私に言われている陰口については、残念ながら対抗するすべがありません。目下のところ、講演に手を入れて発表する時間の余裕がないのです。ただし、いつかそうしたいとは考えております。それと、あなたに講演原稿をお送りすることも出来かねます。原稿は一部しかないのです。誰が私に関して発言したか、そして何が私に対して発言されたかについて、私が知らない限り、私は個々に反論することはできないわけです。キッシュが書いたことについては、私の作品を読んでくださいという以外の反論は必要ではありません。その他、個人が社会に従属するものであることを私が理解していないとの指摘については、その愚かなこと、あいた口がふさがりません。蛇足ながら、私はそのことを強調するために二度繰り返したのです。

私の真意が誤解されたことについては、本当に残念に思っています。と言いますのも、会議について私が受けた印象は、後になるほどに鮮明になってきたからです。受けた誤解については、私自身にも責任の一端がないとは言えないのです。つまり私の講演の言葉はあまりにその場の状況に相応しくないものであり、私があまりに簡潔に、理論的に話したことが原因しているからです。しかしながら語った内容、その本題では、文化はいかなる条件のもとで発展するかという疑問を扱ったのですが、これに関しては非難を受ける余地は皆無です。私の話した内容をあまりにも優柔不断だとか何とかと考える政治の意味合いにおいても、その意味を十分に広く考えるならば、同様です！

敬具 (BI, 659f.)

この手紙は全体として、キッシュとウーゼ連名の文章へのムージルの反論の文章と内容的に一致する。ムージルはキッシュの名前を挙げるが、ウーゼの名前には触れない点も「草稿」のときと同じで、ムージルはキッシュに対しては、何がしかウーゼに対する場合とは異なる感情を持っていた。

パリの会議そのもののヘムージルが抱いていた不信感を伝える別の資料がある。会議の全日程が終了した翌日 6 月 26 日のムージルについての報告がそれである<sup>23)</sup>。夕方 5 時から 7 時にパリのソヴィエト大使館で会議の関係者 400 人が参加してパーティーが開かれた。日ごろは社交を好まないムージルだがこれには顔を見せた。が、パーティーを楽しむとは行かなかったようで

旧知のアルフレート・デープリンに、会議を操っている黒幕についての情報を得たのが遅すぎた、と怒りの気持ちを口にした。

#### IV ケルの講演とそれへの反応

ムーゼルが初日に話をした翌日、6月22日土曜日午後、ケルが続いて壇上に上った。ケルがこの日講演した内容については、概略を知ることができるだけである。すなわち『パリ、1935』ではケルの講演について、わずか半ページが埋められている<sup>23)</sup>。読んでみよう。

ドイツの亡命者たち、追放され、強奪され、亡命地にあってもなお脅かされている者たちは、何よりも先ず（亡命国にあって客人として受ける）「客へのマナー」により実質的な活動することが妨げられる。そうではあってもドイツ人亡命者はヴィクトル・ユーゴの例に敬意を表するものである。彼は同じ状況にあって、猫を猫と、暴君を人間の屑と呼ぶことを何らためらわなかった。

第二に、ドイツ人亡命者は論説を発表する可能性について制限を受けている。ナチの脅迫は外国のプレスにも及んでいるからである。

それにも関わらずドイツ人亡命者は、沈黙することはしない。共通の敵の本性を亡命国の人々に説得することは彼らのなすべきことである。政治と道徳の間に存在する対立—現代という時代の最大の悲劇—を終結させることは彼らの役目である。

亡命者が義務として引き受けるべきこと、それは反抗する殉教者、果実をもたらす犠牲者、そして永遠の幸福が約束された「不運の人々」になることである。

聴衆は大多数がフランス人であった。ケルはこの点を計算に入れて、ヴィクトル・ユーゴを引き合いに出して話を展開している。何を、どのように話さねばならないか、そして聴衆からの反応はどのようなものとなるか、ケルはすっかり計算していたと思われる。そして、結びの部分で、さすらい人である自己の現在を宿命として受け入れ、その上でこれに立ち向かうことをケルは宣言した。

ケルのこの講演については、パリーザー・ターゲブラットがやはり2日後、6月24日に報じるのであるが、講演が行われた22日と講演に関する報告記事が出る24日の間の日、すなわち23日日曜日の紙面に同じパリーザー・ターゲブラットは大きなスペースを割いてケルの詩<sup>24)</sup>を載せた。この日の同紙にはムーゼルが21日に行った講演内容も報じられていたことは、ムーゼルとケルの関係ないし接触を考察する我々にとっては重要な事実である。

ケルの詩と、彼の講演に関する報告記事であるが、日付の順序として詩から読むことにしよう。

#### パリの午前 アルフレート・ケル

##### I

大気には張りがなく、空は不機嫌  
人々は今や遅しと雷雨を待っている。  
リーフグリーン（黄緑）の明るい格子の向こうの  
テュイルリー宮の人々は優雅に構えるばかり。

今の天気は全く変わりやすい。



私はセーヌの町をバスに乗り  
おもむろに新聞に目を落とし  
そして声を立てずに驚愕する。

誰が今もなお友人で、そして誰が敵なのか？  
この判断は難しく、どうにも分からない。  
天気よりも変わりやすいのが  
ご立派なイギリスの政治…  
賛嘆の大声を上げるかと思うと、すぐに小声でひそひそ話し。  
きょうび、信頼できる人は残っているのだろうか。

## II

イングランドの国境はライン川で引かれていたのでは？  
今はまたドーバー海峡に国境線が引かれている。  
国境はアングロサクソン人の  
モラルの光輪の中にある。  
モラルとは「帝国」に役立つものであり  
これについてはつべこべ文句を言うな、と。  
ヒットラーの行為に支持が表明され  
彼の取り巻きはジェントルマンと呼称される。  
賛嘆の大声を上げるかと思うと、すぐに小声でひそひそ話し。  
きょうび、信頼できる人は残っているのだろうか。

## III

ガタガタと揺れながらバスは走る。  
どういうわけか、私はかのヘッベルの  
芝居の指物師を思い出す、  
『マグダレーネ』の中の指物師。  
指物師は大きなため息をついて言う、  
「わしには、世界というものがわからなくなった」

きょうび、世界はそれぞれ徒党を組んでいる。  
そして根っここのところがぐらぐらしている。  
私にはこういう世界が理解できない。  
(そうは言っても、生まれて来てよかった)

## IV

大気には張りがなく、空は不機嫌。  
人々は今や遅しと雷雨を待っている。  
リーフグリーンの明るい格子の向こうの  
テュイルリー宮の人々は優雅に構えるばかり。

この詩はケルのパリ滞在の憂鬱を表現している。この年すなわち1935年の春の時期のケル一家のパリでの暮らしぶりを伝えるエピソードをケルの娘ユーディットが書いている<sup>25)</sup>。靴下の穴など、日々繕いものに苦勞する妻のユーリアを喜ばせようと、ケルはなけなしのお金をはたい

て古ミシンを買って帰ってくる。しかしそのミシンは軸が変形しており、錆だらけで使いものにはならないことがすぐさま判明する。何のことはない、ミシンについての知識などあるはずもないケルが、インチキ古物商にだまされただけのことであった。知り合いのフランス人夫人に伴われてケルはミシンの返却に行くが、お定まりの押し問答。結果はその夫人の応援があって何とかお金を取り戻すことに成功するが、やりとりの経過のすべてが12歳の娘ユーディットの目に映っていることを心の隅で意識しながらケルの惨めさは限りがなかったにちがいない。ケル言うところの「殉教者」の日々は、当然のことながら美しくもなければ、英雄的なところも皆無であった。

ケルの詩であるが、特に解説も必要なかろう。パリの曇りの天気はそのままケルの心の中の風景であり、前日午後3時から国際作家会議の壇上に立ったケルの午前も、心の中を覗くならばやはり曇り空であったろう。

イギリスへの批判が綴られている。イギリスは海の向こうの国である。その調子は厳しい。フランス政府への不満も同様に記されているが、イギリスを批判する調子の方がずっと強い。ヒトラー・ドイツに対するフランス、イギリス両国の姿勢について、現在滞在中のフランスに対してよりも、海の向こうの国イギリスへの口調の方が強くなるケルの気持ちは自然といえば自然といえよう。第1次大戦後、フランスはドイツに対して一貫して厳しい態度をとっていたのに対し、イギリス、アメリカは寛容の態度をとっていた。イギリスがヒトラー・ドイツだからということで急遽、弱腰外交に転じたということではなかった。

フランス外交へのケルの批判のトーンが弱い点に、ケルの現在の悲哀を読み取ることができる点を指摘したい。

講演の2日後6月24日、パリーザー・ターゲブラットはケルの演説について書いた。

[……] カーリン・ミヒャエリスとアンデルセン・ネクセは国際的著作権の連帯について意見を表明した。後を受けてアルフレート・ケルは、防御と攻撃に関して亡命者はどのように行動するべきかを具体的に述べた。「ヒューマニティーを守り通すことは、同時に諸君の祖国を守り通すことである」と彼は、外国からきた訪問者に絶対的な節制を要求する人々に向けて訴えかけた。彼は、ジロドゥが心配顔の自国民に向けて、ドイツは文芸の振興についてどれほどユグノーのお陰をこうむっているかについて書いた一節を引用した。そのあと、ケルはナチの甚だしい反動が外国の精神的な自由にも脅威をもたらす事件に関して報告した。ウィーンのある出版社に対して、もしもこの出版社が誰であれ亡命者の小説を出版するようなことをするならば、その出版社のすべての出版物をドイツに持ち込むことを禁止するとの脅迫がなされた。フランスの出版社主にも同様のことが起きており、彼は自社が出している雑誌の一つで、ある亡命者に発言させたのであるが、彼はこのためにドイツへの入国が拒否された。

十分な理由もあれば、情熱に溢れ、かつ会議によっても絶大な支持を得たアピール、ケルはこれを、精神と文化が暴力にさらされている折に、手をこまねいているだけの政治家や国家の要人たちに向けて行なった。固定妄想に取り付かれた専門家たちに向けてもケルはカール・マルクスを引き合いに出して発言した。そうした人々は、自分たちが政治と呼んでいるものの中にはモラルのための余地を認めていないのであるが、マルクスいわく、国家のモラルは人間的にすぐれた一個人の自明の振る舞いと一致しなければならないのである。すなわちジェントルマンたる者は、教授たちを追放し書物を焼く人たちと一つのテーブルを囲むことはしないものである。

この記事の書き手は、ムーゼル、キッシュラについて書いた人物である。記事にケルへの強い共感が込められていることは明らかである。先の『パリ、1935』の記述とは少し異なるようだ

が、ケルの講演内容を伝える資料としてはこちらの方が信頼できる。この点はさておき、やはりケルはパリの聴衆を前にして、かつてフランスがドイツに果たした文化的貢献について、ジロドゥの言葉を証人にして語った。ジロドゥはドイツ・ロマン派に通じており、ケルもベルリン時代から彼を高く評価してきた。そのジロドゥを引き合いに出しながら、ケルはフランス移民が歴史上ドイツに対して果たした貢献に言及し、それを賞賛したのである。加えて、ヒューマニティーの強調。ケルの今回の講演の特徴、それは毒気のようなものが一切感じ取れない点にある。良心的、進歩主義的ユダヤ知識人としてのケルの姿は見ようによっては、痛々しい。ケルの講演は、こうして非常に好意的に迎えられたのであった。

## V 結び

ケルについては何らの反応も無かったこと、この一点に彼の悲哀がある。ベルリンにおいて19世紀から20世紀への転換期に頭角を現して以降、亡命する33年までおよそ40年の間、批評家として知識人や大衆の注目を集めてきたケルであったが、今パリの舞台での彼の講演は型で抜いた装飾品のように、鑑賞する者に愛でられて、そしてすぐに打ち捨てられた。

反論の余地のない鋭い攻撃であれ、頼む支持者もない四面楚歌の状況に陥ったときであれ、自らが特殊な存在として話題の中心になっている状況を演出することができれば、ケルにとっては本望であり、勝利であった。ケルは主として新聞・雑誌に発表することを前提に文章を書いたという意味ではジャーナリストであった。一日一日の仕事とそれへのセンセーショナルな反応、これがケルの人生の実質を構成していた。

会議の場でケルは最大限の力を振るって講演をした。その講演は皆が期待する内容であった。感動も与えた。しかし、それはこの会議に出席した多くの講演者の話に体裁よく肩を並べるものでしかなかった。苦境への最もりっぱな身の処し方、その手本、ケルはこれを期待されている通りに語った。他に何を語ることができたであろう。

ムージルは違った。文学とは神々の世界に座する者たちの営みであり、そうあらねばならない、ムージルはこう語った。

ムージルとケルはパリの会議の折に顔を合わせたかどうか、言葉を交わしたかどうか、この点は不明である。しかしながら、二人は互いの講演の主旨については知っていた。すなわち新聞が大きく報道しており、先にも述べたように6月23日付パリーザー・ターゲブラット紙には、ムージルとケルの名前が揃って出ているのである。

ケルはムージルの講演をどう思ったであろうか。新聞から知ったのならば「極端なものを出してきた」とつぶやいたかもしれない。会場で聞いたとしても同じであったろう。決して口笛を吹いてやじり倒した著名な亡命ドイツ人の一人ではなかったはずである。ケルは文学作品を、そして人を評して生きてきた。彼自らの告白を引き合いに出すまでもなく、彼の書いた批評のうず高い山は言い換えるならば過ちの山である。ケルは、その都度のムージルの作品のでき不出来については感じたままに良し悪しを評してきた。そうした経過の中でムージルに一貫して認めてきたことがある。それは、ムージルが常に一切の妥協を排した「極端なもの」を提出してくる点である。

ケルにとってムージルの今回の講演の主旨は何ら驚くべきものではなかった。これ以外のことをムージルが語れば、その方がケルにとっては意外であり、借り物の講演のように感じられたであろう。

そして、反響。ムージルはすぐに猛烈な攻撃を受けた。集中砲火さながらの攻撃である。ブ

リュンの新聞の批評などを始めとして、ケルがその攻撃をつぶさに知ることはなかったであろうが、ムージルに浴びせかけられた非難はすでに会議開催期間中だけでも凄まじいものがあり、これに関してはケルにもはっきりと分かっていたはずである。

攻撃という形ではあっても話題を集めたムージルの講演、そして万雷の拍手を集め好評をもって迎えられ、そしてそれだけにとどまったケルの講演。結果として失敗に終わったムージルの講演であるが、その話は皮肉にユーモアの衣をまとわせ、内容は自身の信条の十全の披瀝であり、さらには「特性のない男」の巧みな作品解説であった。

パリ国際会議の折に、ムージルは徹底してムージルであった一方で、ケルはもはや何らケルではなかった。本論の上の部分で、ケルがこの会議開催中にパーラー・ターゲブラットに詩を発表したことに触れたが、この詩はケルがこの後さらにロンドンに逃れたときに、詩集に収められて出版される。その折にはヘッベルに言及した一節が削除されることになる。劇評家ケルならではのくだりである。しかし、異国の地にあって敵国であるドイツの作家を引き合いに出しても、何の効果があるのか、何の共感が期待できようか、そうケルは考えたのであろうか？ケルはもはやケルであることはできなかった。

これも先のところでも触れたが、ムージルは3年後の1938年8月、旅行を装ってウィーンを脱出し、イタリア経由でスイスに亡命し、そして窮乏の中で異国に没する。今そのムージルの未来を思い、暗く複雑な、あるいはひょっとして底意地の悪い気持ちでケルがムージルの講演を受け止めたということはあったかもしれない。そうだとすると、やはりこの会議の折のムージルの講演について、ケルがムージルの最良の理解者であったことは何ら疑う余地はない。

キッシュに触れておこう。

亡命先のメキシコでムージルの訃報に接したキッシュは追悼文を書いた<sup>26)</sup>。その最後のくだりで、キッシュは1935年のパリ会議のムージルに言及している。

[……] ローベルト・ムージルはすべての政治的方向に対して非政治的であると自認し、同時にまた寛容でもあった（これに関しては、ローベルト・ムージル大尉は戦時中には私の上官であり、彼への感謝は尽きるものではない）。しかしながらヒトラーが政権を取るに及び、ムージルはためらうことなく国を去り、また1935年のパリの反ファシズム作家会議に参加し、その折に、高貴な態度で考え抜き、信念において揺らぐところのない講演を行った。ムージルは亡命地のスイスで死にまみえた。享年62歳の人生であった。

追悼文は真情のこもったものであり、人は状況に応じていろいろなことを発言するものだということが分かる。キッシュの「感謝」という言葉は印象的である。1935年当時も、ムージルはキッシュに対して攻撃的な反論をしなかった。ムージルはキッシュの立場、その弱さあるいは苦境について思いやるところがあったのかもしれない<sup>27)</sup>。このように推測する理由であるが、ムージルの人となりに言及したキッシュのこの文は、ムージルの一生をつぶさに知るケルがロンドンで読んだムージルへの追悼文と符合するものを持っており、人に接するときのムージルの公平さと、信念を貫き通す態度を指摘しているからである。

## 注

ムージルのテキストは以下のものを使用した。

Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (P. と略記し、そ

の後にページ数を記す)

Robert Musil: *Tagebücher*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983. (TI. TII と略記し、その後にページ数を記す)

Robert Musil: *Briefe*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981. (BI. BII と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) *PARIS 1935. Erster Internationaler Schriftstellerkongreß zur Verteidigung der Kultur. Reden und Dokumente. Mit Materialien der Londoner Schriftstellerkonferenz 1936. Einleitung und Anhang von Wolfgang Klein*. Hrsg. v. der Akademie der Wissenschaft der DDR. Zentralinstitut für Literaturgeschichte, Berlin (Akademie), S. 10
- 2) P. 1259-1265
- 3) Eduard CastleはDeutsch-Österreichische Literaturgeschichte. 4 Bde. Wien (Carl Fromme) 1914-37の他、ライムントの歴史批判版の编者などとしても知られている。
- 4) ニーチェ「善悪の彼岸」、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集11, 179ページ。ムージルは青春時代に強い影響を受けた本としてメーテルリンクやエマーソンの著作の他に、ニーチェの『善悪の彼岸』と『道徳の系譜』を挙げている。Vgl. BI. 837
- 5) P. 1269
- 6) „Vortrag. Paris. Korrigierte Maschinenschrift“, P. 1266-1269
- 7) Vgl. TII. 743f.
- 8) Edouard Roditi: *Erinnerungen an Musil*. In: *Neue Deutsche Hefte*. Nr. 90, November/Dezember. 1962, S. 28
- 9) Ebd. S. 30
- 10) *PARIS 1935*, S. 56-60
- 11) „Die geistige Front der Schriftsteller – Eröffnung der Internationalen Kongresses“, Pariser Tagblatt. 23. Juni 1935 なお、パリーザー・ターゲブラットはフォス新聞編集長ゲオルク・ベルンハルトがパリで発行した亡命者新聞である。Vgl. Huder, Walter: *Zu Autor und Text*. In: Kerr, Alfred: *Ich kam nach England. Ein Tagebuch aus dem Nachlaß*. Bonn (Bouvier) 1979, S. 12
- 12) *PARIS 1935*, S. 330-333
- 13) コリーノが引用しているのはムージルの短い方のテキストである。Vgl. Karl Corino: *Robert Musil. Eine Biographie*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003, S. 1184-87
- 14) Corino: *Robert Musil*. S. 1195
- 15) Egon Erwin Kisch und Bodo Uhse: *Geist gegen Macht*. In: *Neue Deutsche Blätter*. II. Jahr, Nr. 6, Prag 1935, S. 321-24
- 16) „Berichtigung eines Berichts“. TII. 1255-1261
- 17) „Die Grenze der Kultur gegen die Politik“. TII. 1255
- 18) オットー・ペヒトはブルーノ・フルストに協力してウィーンでムージル基金を創設し、また『生前の遺稿集』の出版に尽力するなどムージルの作家活動を献身的に支えた。Vgl. Karl Corino: *Otto Pächt und Robert Musil*. In: „Am Anfang war das Auge.“ *Otto Pächt. Symposium anlässlich seines 100. Geburtstages*. Hrsg. v. Michael Pächt und Artur Rosenauer. (Privat Druck) München 2006
- 19) TII. 1256
- 20) BII. 379
- 21) Karl Corino: *Otto Pächt und Robert Musil*. S. 29
- 22) Corino: *Robert Musil*. S. 1198
- 23) *PARIS 1935*, S. 86

- 24) Alfred Kerr: „*Vormittags in Paris*“ In: *Pariser Tagblatt*. 23. Juni 1935
- 25) Judith Kerr: *Als Hitler das rosa Kaninchen stahl*. (Ravensburger Taschenbuch, Bd. 8003) 1997, S. 200-206
- 26) TII. 204f.
- 27) パリに到着した早々ムージルは親しい知人たちとカフェに行ったが、それにはキッシュも加わっていた。Vgl. Karl Corino: *Otto Pächt und Robert Musil*. S. 27